



Title	トランスナショナル・ヒストリー研究の最前線：韓国漢陽大学の国際会議（慶州）に参加して
Author(s)	秋田， 茂
Citation	アジア太平洋論叢. 2009, 18, p. 147-153
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100088
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

トランスナショナル・ヒストリー研究の最前線

－韓国漢陽大学の国際会議（慶州）に参加して－

秋 田 茂*

I

近年、国民国家・一国史の枠組みを相対化し、国境を超えて展開するトランスナショナル・ヒストリー研究が注目を浴びている。

アメリカの学術出版社 Palgrave-Macmillan から、ハーヴァード大学名誉教授入江昭氏がP. ソーニエ氏と共同で編集した大部の事典 *The Palgrave Dictionary of Transnational History* が2009年1月に出版され好評を博している¹。トランスナショナル・ヒストリーは、近年筆者をはじめ多くの研究者が提唱している「グローバルヒストリー研究」とも重なる要素が多い。

ここでは、2009年4月20－23日に韓国・慶州において漢陽大学（Hanyang University）主催で開催され筆者も出席した国際会議 ‘Mapping the Transnational: 1st International Conference on Transnational Humanities’ の概要とそこでの議論を紹介することを通じて、トランスナショナル・ヒストリー研究の最前線の一端を垣間見てみたい。

この国際会議は、韓国ソウルの私立総合大学である漢陽大学の「比較史・比較文化研究所」（Research Institute of Comparative History and Culture: RICH）² が新たに取り組む国際共同研究 Transnational Humanities の一環として企画・実施されたものである。この共同研究は、韓国研究財団（Korea Research Foundation）からの財政的支援のもとで、10年計画で展開されている人文科学領域の大型研究

* 大阪大学文学研究科世界史講座

Humanities Korea プロジェクトの一つであり、韓国版のいわばCOEに相当する。会議の主催者は、歴史学部の教授で、RICH所長でもある林 Lim Jie-Hyun教授であった。

林は、韓国を代表するトランスナショナル・ヒストリーの研究者であり、20世紀の東欧、とりわけポーランドの社会主義思想史、文化史研究で優れた業績をあげている。RICHを率いる林教授の研究面でのネットワークは世界中に広がっており、今回の会議には欧米諸国を中心に世界各国から、東アジア地域研究に関連する約30名の研究者が招聘されていた。日本からは筆者以外に、日本現代史研究の三谷博（東京大学）、朝鮮文化史研究の板垣竜太（同志社大学）、朝鮮古代史の李成市（早稲田大学）、朝鮮文学の渡辺直紀（武蔵大学）の各氏が参加した。歴史学の領域とカルチュラル・スタディーズ、社会思想史、人類学研究の対話と融合をめざした学際的な国際会議であった。

II

まず、会議の基調講演を、林とアメリカ・コーネル大学の酒井直樹が行った。酒井は‘Transnational Literature and Translation: the Grammatology of Heterolingual Address’と題する講演を行い、トランスナショナル文学の有効性を主張した。氏によれば、言語のイメージは近代に再構成され、国語は特定のイメージを通じて形成されたこと、文化は国語イメージに沿って形作られること、従って、国民文学（national literature）はトランスナショナル文学の派生物にすぎない。林は‘A Journey Towards Transnational Humanities’と題して、(1)国家・階級・ジェンダー・人種・宗教など20世紀に固定化された範疇を超えて考えること、(2)普遍性と特殊性の二分法を超える特異性の探求、(3)ヨーロッパ中心主義を超える人文科学の構想、(4)国民国家のくびきからの人文科学の解放、(5)現在のグローバル化に代わる下からの相互連関性（interconnectivity）の探求、(6)国民国家の教育制度、学際を超えたポスト・ディシプリンの模索、(7)研究ネットワークのグローバル化と国際協力による‘flying university’構想（後述）を提唱した。

第二日目は4名の報告者を中心に活発な議論が展開された。

シンガポール国立大学のP. ドュアラは、‘Asia Redux: The History of an Idea over the Last Century’ と題する報告を行い、20世紀のアジアにおけるトランスナショナルな展開を、(1)世紀初めの文化的・民族的一体感の形成、(2)世紀中葉における反帝国主義運動の展開、(3)そして現代における諸地域間の相互依存の出現、以上の三段階に区分した。デュアラは、ASEANに見られるようなアジアにおける地域主義の形成はヨーロッパとは異なるものであり、シンガポールのような都市ネットワークの形成と「地域公共財」の提供により支えられているとし、アジア経験の独自性を強調した。

シカゴ大学のM. ガイヤーは、‘On the Act of Nailing Pudding on the Wall’ と題する講演で、時間と空間の両面からトランスナショナル・ヒストリーの研究対象に言及した。彼は研究課題として、モノの商品連鎖 (commodity-chains) を通じたつながり、権力関係の非対称性を強調したうえで、ヒト・モノ・国際関係 (パワー) ・思想・知識の四つのレヴェルにおける関係性、諸国の相互作用をあげた。その具体例としてシドニー・ミンツの砂糖の研究³をとりあげ、「関係性」の観点からトランスナショナル・ヒストリー研究の有効性を主張した。

次いで、ドイツ・フライブルク大学のS. ベルガーは、‘The Nation as History: Historical Consciousness and National Identity in 19th and 20th Century Europe’ で、ヨーロッパにおける国民意識の形成過程を振りかえった。そして、汎スラブ主義や汎ゲルマン主義のような広域の民族思潮と「マクロ地域」 (macro-regions) 概念の出現のユニークさを強調した。彼によれば、近代のハプスブルク帝国に代表される帝国体制、その下での帝国ナショナリズムの形成と展開は、現代中東欧においてマクロ地域概念が形成される歴史的基盤のひとつになった。

第三日目は、デューク大学のD. サクセンマイアー⁴が ‘The Landscapes of Global History: Situating a Field in Its Academic Environment’ と題する報告を行った。彼は、最近の歴史学における新たな研究動向を整理し、政治的に規定された空間を超える、あるいは国境を跨ぐ「新たな空間」 (new space) を前提とする諸研究⁴を重視する。具体的には、海域史としての大西洋史・インド洋史・海域アジア史⁵に着目している。これらの transnational, trans-regional あるいは trans-continental という新たな空間概念は、従来の西洋中心史観への挑戦であり、相互に重なり連

なりながら万華鏡的な領域を形成しつつある。サクセンマイアーは、LSEのP. オブライエンを中心とするグローバル経済史研究ネットワークの例⁶をあげながら、新たな領域で成果を出すためには国際協力、共同研究が不可欠であることを主張した。

午後は、総合討論と記念講演、および史跡の実地見学にあてられた。総合討論では、トランスナショナル・ヒストリー研究で批判対象とされるヨーロッパ中心主義の内容が問題にされた。酒井直樹は、「西洋」自体も多様性・ヴァリエーションを持つものであるが、依然としてナショナル・ヒストリー（自国史）形成のモデルとされていること、英語による「言語帝国主義」的現象を回避するには、翻訳・通訳を通じた共通の多言語による舞台設定（trans-lingual practice）が必要であることを強調した。また、S. ベルガーは、理解を深める共通語を模索する試みとして、ピジン英語の活用を主張した。

ポスト・セッションでは、早稲田大学の李成市が、「発見された新羅—『新羅千年の都』の景観から見た新羅・日本関係史」と題する記念講演を日本語で行い、これは韓国語と英語に逐次通訳された。李の講演と本会議の舞台となった慶州の歴史そのものが、日本による植民地支配下での学術調査と文化財保存問題も含めて、まさにトランスナショナル・ヒストリーの実例として位置づけることが可能である。日・英・韓の三カ国語を駆使した記念講演は、前述の言語帝国主義現象を避け、トランスナショナルな共通の理解と相互認識を促す具体的な実践例となった。

会議の最後に主催者の漢陽大学から、‘Flying University of Transnational Humanities’の具体的な提案があった。これは、研究と教育の両面での国際協力を通じて、「ナショナルなもの」を問題化して、トランスナショナル人文学の構築をめざす共同プロジェクトの提案である。WEBを通じた情報交換に加えて、毎年8月に研究ワークショップ（2日間）と大学院セミナー（4日間）を組み合わせた対面的な相互交流の場を設定し、共通の問題を集中的に議論しようとする企画である。大学・研究機関だけでなく、個人レベルでの参加と交流も期待されている。

III

以上、韓国・漢陽大学が主催した国際会議の事例を通じて、最新のトランスナショナル・ヒストリー研究の研究動向を紹介してきた。

この慶州会議自体は、人文学の分野における国際的水準の研究を重点的に支援しようとする Humanities Korea Project の一環として行われた。韓国研究財団は、2008年から10-20校の研究機関・大学に総額200億ウォンの資金援助を開始している⁷。その助成期間が10年間と長いのが特徴的である。10年のタイムスパンで考えると、若手研究者の育成も含めてかなり戦略的に研究プロジェクトを立案できる。豊富な資金的支援を得て、韓国の主要大学は、歴史学分野ではトランスナショナル・ヒストリー（漢陽大学）やグローバルヒストリー（梨花女子大学）の研究に本格的に着手している。他方、日本ではグローバルCOEプロジェクトが2007年度から展開され、人文科学分野でも12大学が支援を受けている。しかし、そのなかで「史学」を中心に掲げたプロジェクトは2件（そのうち一件は資料のデジタル化）のみで、哲学・思想や文化交渉等、関連する隣接分野を含めても4件に留まる⁸。しかも、その助成期間は5年間と限定的であり、プロジェクト終了後は各大学独自の財源による運営が求められる。こうした対照的な財政支援状況が続くと、将来的に歴史学の分野で、韓日格差が広がる可能性がある。科研費等の外部資金全体での比較は別に行う必要があるが、国際会議の開催と成果の発表、国際ネットワークの構築、国際的な情報発信とそれを支える学問的インフラの整備、若手研究者（特任研究員）の養成、いずれの側面でも日本の歴史学は遅れをとっているのではないかという危機を感じる。従来の一国史的（ナショナル）な枠組みにこだわるだけでは、研究領域の充実にも限界があるのではないだろうか。新たな世界史的な発想が求められている。

ただこの韓国の会議において、トランスナショナル・ヒストリー研究の具体的で明示的な研究課題が提示されたわけではない。あくまでも人文科学全体のトランスナショナル化の必要性和、それによって開けてくる新たな展望が抽象的に議論されたにとどまり、本格的な研究の展開は、Flying University 構想の実現に先送りされた。だが、実質的な研究のレベルでは、大阪大学歴史系・世界史講座

が中心となって展開している「阪大史学の挑戦」（前述の桃木至朗を中心とする海域アジア史、森安孝夫を中心とする中央ユーラシア史、筆者を中心とするグローバルヒストリー）の実例の方がはるかに先鋭的である⁹。筆者は、韓国会議の質疑において、近現代の大阪を中心とした世界史像の提示の試み、アジア地域間貿易の展開とアジア諸地域の独自の工業化・経済発展論の探求、海域アジア史と中央ユーラシア史の接合などを紹介し、歴史学からの具体的実証をふまえた研究として注目を集めた。概念の「空中戦」にとどまらない特定の研究課題（agenda）の設定が不可欠であろう。

最後に、漢陽大学の会議で提唱された共同研究 Flying University 構想にみられるように、新たな視角からトランスナショナルな研究を行うには、国際的な学界の協力・連携が不可欠となる。その点で、2009年5月末に正式に発足したアジア世界史学会（Asian Association of World Historians: AAWH）の活動はユニークである。AAWHは、アジア太平洋地域において広義の世界史（グローバルヒストリー、トランスナショナル・ヒストリーを含む）の研究・教育に従事する広範な人々の協力を得て、アジアからの新たな世界史像・世界史研究を探求し、その成果を、教育を通じて実社会に還元する試みである¹⁰。AAWHは、第一回国際会議（大阪）のテーマとして‘World History Studies and World History Education’を掲げた。AAWHの活動はまさに始まったばかりであるが、歴史学の側面から Transnational Humanities の構築に貢献できる。今後は、漢陽大学の Flying University やAAWHなど多くの諸機関・大学・高校の世界史教育関係者・マスコミ等の協力を通じて、新たな歴史像の探求と提示が可能になるであろう。一人でも多くの皆さんの御協力と議論への積極的な参加をお願いしたい。

注

- 1 Akira Iriye and Pierre-Yves Saunier (eds.), *The Palgrave Dictionary of Transnational History* (New York and London: Macmillan, 2009). 同書の出版に関して、一連の書評が掲載されたWEBも参照：<http://www.transnationalhistory.com/discussion.aspx>
- 2 <http://rich.hanyang.ac.kr>
- 3 Sidney Mintz, *Sweetness and Power: the Place of Sugar in modern history* (New York, 1985) シドニー・ミンツ（川北稔・和田光弘訳）『甘さと権力』（平凡社、1988年）。

- 4 国境を跨いだ広域 (mega-region) 史構築の試みは、既に跨境史として北海道大学スラブ研究センターの21世紀COEプロジェクトの成果として提示されている：松里公孝編『講座スラブ・ユーラシア学(3)ユーラシア帝国の大陸』(講談社、2008年)。
- 5 世界初の研究入門書として、桃木至朗編『海域アジア史研究入門』(岩波書店、2008年)。
- 6 <http://www.lse.ac.uk/collections/economicHistory/GEHN.htm>
- 7 <http://hero2.krf.or.kr/KHPapp/eng/research/orp/orp08.jsp>
- 8 http://www.jsps.go.jp/j-globalcoe/05_kyoten_d.html
- 9 『歴史科学』No.197 (2009年)と特集〈歴史学と歴史教育のあいだ〉、特に、桃木至朗「現代日本における歴史学の危機と新しい挑戦」；桃木至朗『わかる歴史、おもしろい歴史、役に立つ歴史－歴史学と歴史教育の再生をめざして』(大阪大学出版会、2009年)；秋田茂「グローバルヒストリーの挑戦と西洋史研究」『パブリック・ヒストリー』5号(2008年)などを参照。具体的な成果としては、森安孝夫『興亡の世界史5 シルクロードと唐帝国』(講談社、2007年)；懷徳堂記念会編『世界史を書き直す 日本史を書き直す－阪大史学の挑戦』(和泉書院、2008年)；秋田茂・桃木至朗編『歴史学のフロンティア－地域から問い直す国民国家史観』(大阪大学出版会、2008年)。
- 10 <http://www.let.osaka-u.ac.jp/seiyousi/AAWH/index>